

ヒメカワハナヒリノキの現状

高橋 務

2007年8月、ヒメカワハナヒリノキの現状を見るために糸魚川市頭山を訪れた。

ヒメカワハナヒリノキ (*Eubotryoides Grayana* HARA var. *Iwanoi* AJIMA et SATOMI) は、故岩野俊逸先生が1975年に頭山で発見、1977年に安嶋隆氏によってハナヒリノキの一新変種として発表された。



ヒメカワハナヒリノキの発見者 (左) と当時の群生 (右) (1977.10.10)

ヒメカワハナヒリノキは、高さが30cmくらいで、よく分枝し地表に匍匐し、葉は長さ2.5~3.0cm、幅1~2cm、花序も小さく花数少ない矮小の種である。

生育する場所は、北東に面した岩場で急な斜面の下部や周辺に生育するコナラ、タカノツメ、リョウブなどの樹冠が覆うので直射日光は殆ど射し込まない。両側に溶岩の露頭がそそり立ち、その間の窪地下部に破碎した砂礫が堆積するところに2~3×2mの範囲に生育している、数m離れた場所に数本生育しているが、少し離れた似たような岩場の砂礫地には、ウスノキが同じ様な生活形で生育していたが混生は見られなかった。

ヒメカワハナヒリノキの生育状況を詳しく調査したわけではないが、発見当時および三十年前に比べると、花、果実を着けていないこと、1977年の写真 (不鮮明な) と比べると群生密度がまばらで、衰退しているように思われる。

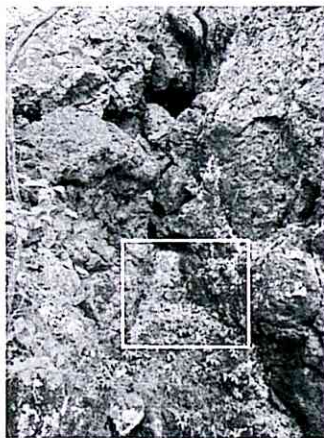


写真1 ヒメカワハナヒリノキ
生育地上部



写真2 写真1の枠内拡大



写真3

2007年の生育地と生育状況 (2007.8.9)

今後、生育地の周辺の植物、地形・地質・日照などの環境、数えられるほど少ない個体数の変化など詳細な調査が必要であり、遺伝子レベルでの変種成立の研究が進めば面白いと思う。

特殊な生育環境で極めて少ない個体数であるから、現状の保護保全が必要である。

- 1) 安嶋 隆 (1977) : ハナヒリノキの一新変種、北陸の植物、第25巻、第3号。
- 2) 岩野俊逸 (1985) : 越後沿岸の社叢林、植物地理・分類、第35巻、第2号。
- 3) 小国生物友の会「かたこ」60・61号、(2007)。
- 4) 小国生物友の会「かたこ」62号、(2008)。

(2008年1月10日 記)

付記

- (1) 岩野先生は、「越後沿岸の社叢林」植物地理・分類 (1987) に、県内沿岸の社叢林を7カ所紹介のなかに、頭山の神社社叢を取り上げ、主な植物を列記するなかにヒメカワハナヒリノキを記している。
- (2) 2007年8月の観察では、自生地のものには、着花・着果は見られなかった。自宅栽培のものでは、果実を着けていた。
- (3) 栽培は容易である、栽培中の種子繁殖は不明、挿し木増殖は容易である。